

質的研究の科学性に関する一考察

住 政二郎
流通科学大学

キーワード: 質的研究, 実存論, 観念論, 構造構成主義

1. はじめに

近年, 外国語教育学の分野でも, 質的研究の裾野は広がりつつある。質的研究は, 「研究」という看板を掲げているのだから科学であるはずだ。しかし, 質的研究が持つ「科学性」について, 著者は明確な考えを持っていない。また, 「質的研究は科学である」と聞くと, 何ともいえない違和感を感じていた。このままやり過ごすことはできたが, この違和感を放置しておく, 例えば将来, 運良く (悪く?) 教え子ができて, 「質的研究をやりたい」などと言われたら, とても焦るだろう。こんなことから, 質的研究については, いつかは自分の言葉で説明できるようにならなければ, という勝手な責務を感じていた。また, 質的研究の発表を学会で見聞し, 発表者とフロアとのやり取りが噛み合わず, 拡散する議論に研究の成果が回収されてしまうことを, とても残念に思っていた。研究の向こう側に多大な時間と労力を提供してくれた参加者がいることを思うと心が痛んだ。

外国語教育メディア学会関西支部・メソドロジー研究部会 (以下, メソ研) では, 著者の勝手な焦燥感と, 質的研究が置かれている状況を改善していくために, 量的研究に加え, 質的研究についても活発な議論を重ねてきた。その結果, 科学的論理性, および原則と要件を踏まえることによって, 「質的研究は科学である」と明言できる段階にまで議論を深めることができ, 著者の焦燥感も解消された。

本章は, メソ研で重ねられてきた議論の成果物である。メソ研の成果物ではあるが, 本章の内容に関する責任は, すべて著者自身にある。質的研究を専門としない者が, また, 質的研究の論文を 1 つも書いたことがない者が, 質的研究の科学性などと大きな看板を掲げても, 失敗することは目に見えている。しかし, メソ研を踏まえた現時点での到達点を公開し, 皆様からのご批判を頂戴しながら, 今後の実りあるメソ研活動に役立てることができればと, 勝手ながら願っている。

2. 質的研究とは?

まず, 質的研究の定義を確認し, 考察のスタート地点を共有したい。質的研究には, 以下のような定義がある。

質的研究は、その場に生きる人々にとっての事象や行為の意味を解釈し、その場その時のローカルな状況の意味を具体的に解釈し構成していく（meaning-making）ことをめざしています。（秋田, 2007, p.9）

質的研究とは具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする分野である。（フリック, 2002, p. 19）

質的研究とは、具体的な事例を重視し、それを文化・社会・時間的文脈の中でとらえようとし、人びと自身の行為や語りを、その人びとが生きているフィールドの中で理解しようとする学問分野である。（やまだ, 2004, p. 8）

上記の定義によれば、質的研究とは、（a）場に根差し、（b）人々の相互作用を対象に、（c）行為の意味を理解する学問分野、とまとめることができる。しかし、一般的な科学性と量的研究に慣れ親しんだ読者には、上記の定義を読むと、すぐに次のような疑問が湧くのではないかと。なぜ、場に根差し、人々の相互作用を対象に、行為の意味を理解しなくては行けないのか？ なぜ、質的に行為の意味を理解する必要があるのか？ 量的に調べることはできないのか？ 質的に調べるのであれば、質的にしか調べられないものがあるはずで、それは一体何なのか？

残念ながら、著者はこうした質問への分かりやすい回答を、質的研究の専門書の中に、これまで見つけることができなかつた。また、調べていく過程で、質的研究だけに考察を加えても、こうした疑問点を解消することができないことが分かつた。

そこで、本章では、量的研究と質的研究を並列させ、科学哲学の蓄積を補助線に、双方が根差す認識論について整理することからはじめた。こうすることによって、量的研究と質的研究の双方が根差す科学観を明らかにし、上記の疑問を解消することができた。さらに、構造構成主義（池田, 1998；西條, 2005）に依拠することによって、量的研究と質的研究を横断する科学性について考察することが可能になった。

3. 科学とは？

3.1 世界の「見方・見え方」

科学とは、「世界の確からしさに接近する試み」といえる（伊勢田, 2003；戸田山, 2005）。私たちは、この世界に対して、「確かな」知識を蓄積し、科学を発展させてきた。

本章では、世界を「私たちを取り巻き、法則によって支配されている実存世界のこと」と操作的に定義する。実存とは、「現実存在すること」（新村，2008，p. 1254）という意味であり、その意味には「客観性」が含まれている。事物 X が客観的に存在するという状態は、事物 X が「特定の個人的主観の考えや評価から独立して、普遍性をもっていること」（新村，2008，p. 708）と定義される。つまり、実存世界とは、私たちの主観からは独立して客観的に存在する世界のことであり、科学とは客観的に存在する世界についての知識の確かさをアップさせる営為となる。

しかし、本当に世界は客観的に存在するのだろうか？ アタリマエである。でも、本当なのか？ 実はこの問いには、科学の本質に迫る重要な問いが隠されている。なぜか？ 先に「科学とは客観的に存在する世界についての知識の確かさをアップさせる営為」とした。しかし、科学の対象となる世界の中に、私たちは住み込んでいる。つまり、世界は、私たちの認識と認知フィルターを通して、また、私たちの認識と認知フィルターが知覚可能な範囲において、目前に「見える」または「見えてくる」対象である。これは揺るぎない「世界の初期設定」である。この揺るぎない世界の初期設定を踏まえても、世界は私たちの主観から独立して客観的に存在すると宣言できるだろうか。科学は人間が生み出したものであり、人間が営むものである。ならば、科学は人間が認知、知覚、および記述可能な範囲における営為であり、そこでは客観性よりも主観性、普遍性よりも有限性が重要になるのではないか？

以上の議論は、一見言葉遊びのようだが、量的研究または質的研究の本質を考える上で重要な要素を含んでいる。そして私たちは、世界の内に座しながら、科学という人間的な営為を成立させるために、いろいろな工夫をしてきた。その1つが、世界の「見方・見え方」を取り扱う認識論である。

3.2 実存論と観念論

認識論には2つの立場がある。¹ その1つが実存論である。実存論は、私たちの認識の外に、私たちの主観から独立した、客観的な世界の存在を認める立場をとる。実存論では、世界は私たちから独立して客観的に存在するが故に、主体（観察者）と対象（世界）の切り離しが可能である。切り離すことができるから、世界を対象化し、数量を使って量的に計ることができる。以上の理由から、量的研究は実存論に根差すといえる。私たちが外国語教育学で量的研究を行う場合は、実存論に立つことになる。

もう1つの認識論は、観念論である。観念論は、私たちの認識の外に、私たちの主観から独立した、客観的な世界があるかどうかは分からないという立場をとる。なぜならば、観念論は、客観的な世界があったとしても、その世界の有り様は、私たちの認識によって

常に規定されており，私たちが，ありのままの客観的な世界を経験することは不可能だと考えるからである。なぜ不可能なのか？ その鍵となるのが言葉である。例えば，「きれいだな」，「お腹が減った」，または「なんで Aさんは Bさんにあんな事を言ったのだろう」という認識活動は，私たちが世界に言葉を使って意味づけすることによってはじめて成立する。このことは，私たちの認識活動が，言葉から逃れることができず，また，私たちが言葉を抜きには考えることができないことを意味している。つまり，私たちは，言葉が行き渡る範囲を超えて，思考をめぐらせることができないのである。これを村上（1979）は，言葉の「公共性」と呼ぶ。観念論では，主体（観察者）と対象（世界）とを切り離すことは不可能であり，世界についての知識を得るために，世界に参加して，言葉を使って世界を記述する必要性が生じてくる。以上の理由から，質的研究は観念論に根差すといえる。私たちが外国語教育学で質的研究を行う場合は，観念論に立つことになる。

3.3 観察の理論負荷性

私たちが，ありのままの客観的な，誰にとっても同じ世界を経験することは不可能だと考える観念論的世界観は，同じ事物を見ても，観察者の視点と意味づけ（解釈）によって，観察の内容（目に見えるもの）が異なるという身近な経験からも説明できる。これは「観察の理論負荷性」（ハンソン，1986）と呼ばれる。よく知られた例では，同一の絵が，観察者の視点によって，アヒルやウサギに見える多義図形がある。²

「ネッカーの立方体」（Necker Cube）も有名な例である。これはネッカーという鉱物学者が顕微鏡で結晶を眺めている時に実際に体感したものであるとされている（村上，1979）。図1を見て欲しい。

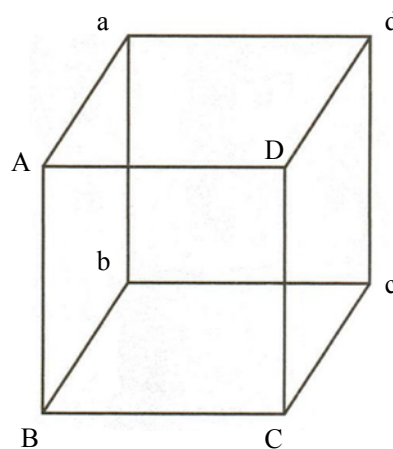


図1. 立方体

通常の状態では、図 1 は、頂点 ABCD で囲まれた面が前面にある立方体に見える。しかし、紙面を逆さまにして、もう一度だけ図 1 を見て欲しい。すると奥行きが反転が起こり、頂点 abcd で囲まれた面が前面にある立方体が見えてくる。

他には、ダヴィエルの開眼手術の報告もよく引用される。ダヴィエルは医師で、白内障の手術法を考案した。ダヴィエルの報告によると、先天性白内障で手術を受け、視力を回復した患者は、手術後すぐには何を見ても、形、大きさ、立体感はもとより色さえも区別することができなかった。そして、患者は一定の期間の訓練を受け、形、大きさ、および色をようやく認識できるようになった（池田，1998，p. 45；伊勢田，2003，p. 78）。

これらの例が指し示すことは何か？ これらの例は、人間の知覚と解釈は一体であり、私たちはありのままの客観的世界を直接的に認識することはできないことを裏づけている。世界は客観的事実の集合として私たちの前に「見える」のではなく、私たちの解釈、つまり意味付与のプロセスを経て「見えてくる」ものとして位置づけられる。これは、客観的世界が、主観から独立して、誰にとっても同じく存在するのではなく、多義性に開かれていることを意味する。村上（1979）は、「『見る』ということは、人間=バケツが外から流れ込む情報を受動的に受け取る、というようなものではなく、むしろ、人間の側のもっている『理解』の能力を駆使して、能動的に何かを造り出す作業だ」（p. 165）と指摘している。この考え方が、観念論の基礎になる。³

4. 量的研究と質的研究の対立と融合

これまでの議論を一度整理する。科学を「世界の確からしさに接近する試み」と定義した。科学が理解を試みる世界には、世界の「見方・見え方」をめぐって 2 つの認識論があった。1 つが実存論で、もう 1 つが観念論である。実存論的世界観に立つ科学は、客観的に「見える」世界を対象に、科学の成立を試みる。ここでは、客観的に「見える」世界を、操作的に「現実」とする。故に、量的研究は「現実」を対象とする科学になる。観念論的世界観に立つ科学は、意味づけられて「見えてくる」世界を対象に、科学の成立を試みる。ここでは、意味づけられ「見えてくる」世界を、操作的に「現象」とする。故に、質的研究は「現象」を対象にする科学になる。

では、実存論的世界観に根差す量的研究と、観念論的世界観に根差す質的研究とが、同じ科学観を共有したり、量的研究と質的研究とを組み合わせる研究をデザインしたりすることは可能なのだろうか？ 量的研究と質的研究の対立と融合について考察を深めていく。

4.1 対立する信念

まず、実存論的世界観に根差す量的研究と、観念論的世界観に根差す質的研究との対立点について整理する。量的研究と質的研究は、互いに根差す世界観が異なるため、歩み寄ることはできない。また、量的研究と質的研究を組み合わせることはできない。これは「共約不可能性」（または「通約不可能性」と訳されている *incommensurability* という概念で説明することができる。

この「共約不可能性」は、クーン（1980）によって提唱されたもので、別の言い方ではパラダイムと呼ばれる。共約不可能性とは、物事を理解する体系（理論、方法、および概念）が異なる場合、同じ帰結に達することはないとする考え方である。そして、導かれた帰結は、双方にとって意味が不明で、比較することができないという考え方が共約不可能性である（池田, 1998, p. 51；伊勢田, 2003, p. 78；西條, 2008, p. 124）。

この考え方を、実存論的世界観に根差す量的研究と、観念論的世界観に根差す質的研究に適応すれば、導かれる帰結が共約不可能性に陥るのは自然である。なぜならば、量的研究は、客観的に「見える」世界を対象に、科学の成立を試み、一方、質的研究は、意味づけられて「見えてくる」世界を対象に、科学の成立を試みるからである。量的研究と質的研究は、世界の「見方・見え方」の点において、信念対立に陥っている。⁴ 学会で見られる質的研究の不毛な質疑応答は、信念対立の結果といえる。

4.2 構造構成主義

次に、実存論的世界観に根差す量的研究と、観念論的世界観に根差す質的研究との一致点について整理する。量的研究と質的研究との一致点を見だし、量的研究と質的研究を組み合わせるためには、双方が共有可能な科学観（信念）を構築する必要がある。それが「構造構成主義」である。

構造構成主義は、量的研究と質的研究とに共通する科学論を提供する「メタ理論（原理）」（池田, 1998；西條, 2005）と考えられている。構造構成主義は、「信念対立（二項対立図式）の超克、絶対化された方法論の相対化（方法論の多様化）、科学性の担保」に貢献する（西條, 2005, p. 207）。以下、(a) 「信念対立（二項対立図式）の超克」、(b) 「絶対化された方法論の相対化（方法論の多様化）」、および (c) 「科学性の担保」について説明する。

4.3.1 信念対立の超克

信念対立の超克を考えるために、1つの質問を用意する。なぜ、量的研究は実存論的世界観に根差し、質的研究は観念論的世界観に根差すことができるのか？ 実は、この問い

に対する答えを用意することは原理的に不可能である。なぜならば、量的研究は、実存論的世界観を信念とすることによって、質的研究は、観念論的世界観を信念とすることによって、はじめて成立する科学であるからだ。これは冒頭で説明したように、私たちが世界の内に座する住人でありながら、科学という「世界の確からしさに接近する試み」を成立させるために必要な工夫であり、根本仮説という論理的たがである。

構造構成主義は、信念対立の超克をするために、双方が互いの信念を自然とするのではなく、いったんは信念を「括弧に入れ」、信念対立を生じさせている要因を共有する戦略をとる。このように信念を括弧に入れることを、現象学では「判断中止」（エポケー）という（西條，2005）。⁵ 信念の「判断中止」によって、量的研究と質的研究とは、双方が根差す認識論の根本原理の不在性に直面し、認識論的基盤を共有できる。

さらに、共有された認識論的基盤を起点に、実存論に根差す量的研究を選択するのか、それとも観念論に根差す質的研究を選択するのかは、研究者の「関心相関性」によって決定されている（に過ぎない）と、構造構成主義は考える。つまり、量的研究か、それとも質的研究かという選択は、先験的且つ絶対的なものではなく、研究者の「関心」によって相対的に決定されると構造構成主義は考える（西條，2005，p. 53）。なぜならば、量的研究にしる、質的研究にしる、科学そのものが、人間が言葉を使って世界（現実および現象）を記述する営みであり、量および質の選択が、主体の関心を逃れることはできないからである。このように信念の「判断中止」を経由し、「関心相関性」の存在を自覚することによって、量的研究と質的研究は、認識論的基盤を共有することができる。しかし、これだけでは双方の信念の対立を超克することはできない。双方の信念対立を超克するためには、認識論的基盤を共有すると同時に、科学の目的を共有する必要がある。

4.3.2 絶対化された方法論の相対化

量的研究と質的研究の間で、科学の目的を共有することは、どのようにして可能なのか？ 構造構成主義は、科学の目的を次のように考えている。水を例に考察を加える。水には、富士山麓の水や、熊本阿蘇の水など、多様な種類がある。この次元においては、富士山麓の水と、熊本阿蘇の水とは、違うものである。この次元では、多様な世界（現実または現象）が存在している。しかし、富士山麓の水と熊本阿蘇の水とが、H₂O と表現された時に、それらは誰にとっても了解可能な同じものになる。私たちは、富士山麓の水と熊本阿蘇の水を H₂O と表現することによって、水についての一般化可能な知識を獲得し、世界の確からしさに接近した。

このように、構造構成主義は、世界（現実または現象）には、その世界を支持する（可能とする）構造と秩序が存在し、科学の目的は、世界を支持する構造と秩序を、言葉また

は記号を使って構造化し、一般化可能な知識を獲得することと考えている（池田，1998；西條，2005）。⁶ ここでの一般化とは、狭義の科学観に根差す一般化ではなく、共通理解可能な知識という意味である。

科学を「現実または現象を支持する構造と秩序を言葉または記号によって構造化する営為」と再定義することは、重要な意味を含んでいる。なぜか？ それは、言葉と言葉の関係式に構造化された世界（現実または現象）が、結果的に誰にとっても共通理解可能なものでなれば、科学の対象が、「見えるもの」であっても、「見えてくるもの」であっても、本質的には問題ではなくなるからである。つまり、「自らの意識や経験とは独立に存在している外部世界の実存を仮定せずに、共通理解を保証し、科学的な知を構築可能であることを論証」（西條，2005，p. 112）することが可能になり、認識論の信念対立を超克し、量的研究と質的研究に共有可能な新しい科学観の地平を開くことができる。同時に、現実または現象を支持する構造と秩序を構造化するという科学の目的が達成できるのであれば、量的研究および質的研究の選択は、絶対的なものではなく相対的なものになる。

4.3.3 科学性の担保

最後に、科学性の担保について考える。これまでの議論を経て、科学は「現実または現象を支持する構造と秩序を言葉（記号）によって構造化する営為」と再定義され、量的研究と質的研究を横断する科学観である構造構成主義を設定した。では、どのように、現実または現象を言葉（記号）で構造化するプロセスの科学性は担保されるのだろうか？

現実または現象を言葉（記号）で構造化するプロセスの科学性は、科学的論理性によって担保される。科学的論理性とは何か？ 科学的論理性には、広義に2種類がある。1つが、仮説検証型であり、もう1つが仮説生成型である。前者は、仮説を立て、経験を通して検証・確証し、得られた結果に妥当な推論を加えることによって可能となる。後者は、経験を経てから仮説を立て、検証・確証し、結果から妥当な推論を導くことによって可能となる。⁷ ここでの経験とは、観察、実践、そして調査などを通じて、現実または現象を支持する構造と秩序を知ることを目指す。

推論には、「演繹」（deduction）と「帰納」（induction）がある。演繹は、例えば「すべての X の足の数は 3 本である」という前提が予め認められる場合、X のヴァリエーションである、 X_1 , X_2 , X_3 , そして X_n は、観察することなく「3 本足だ」という予言を自動的に導く。このように演繹は、一般的・普遍的な前提から、具体的な事象を事前に説明可能にする。演繹は、新しい推論を導くことはできないが、正しい推論を導くことができる。

一方で帰納は、連続して経験される個別の事象から、一般性を導く推論である。帰納の特徴は、連続する少数の発見から、事象についての新しい推論を導くことである。帰納に

は、(a) 枚挙的帰納法、(b) アブダクション（最良の説明への推論）、(c) アナロジー（類推）の 3 種類がある。⁸ 枚挙的帰納法は、一般的な帰納法で、「箱からボールを取り出したら 5 つ連続で白だった。だから次も白だろう」という結論を導く。この方法は、実証研究で使われ、得られた結果から考察を導く、というように外国語教育学の論文の中でもよく見られる。アブダクションは、「何か新奇のこと (A) が起こった。これを説明するのにある仮説 (H) を使うと上手く説明できる。他に有力な仮説がない。だから A を H で説明できる」という結論を導く。質的研究で利用される KJ 法は、新たな知見や仮説を生む発想法であり、アブダクションと呼ばれる（木下, 1999, p. 173）。アナロジーは、「ライオンはネコ科に分類される。ライオンとトラは似ている。だからトラもネコ科に分類される」という結論を導く。異質なものの類似性（同型性）を比較検討することで一般性を導く帰納的推論（アナロジー）は、質的研究（特に構造構成主義）における一般化を考える上で重要な概念である。以上、3 つの帰納的推論の特徴は、連続性・関係性・類似性のある事象から、妥当な推論を通して新しい情報を付け加え、世界の確からしさに接近していくことである。

しかし、帰納的推論には、帰納によって導かれた結論を正当化することはできない、という大きな欠点がある。つまり、「箱からボールを取り出したら 5 つ連続で白だった。だから次も白だろう」という結論を正当化する根拠は、実はどこにも存在しない。この問題は、18 世紀スコットランドの哲学者であったデイヴィッド・ヒュームによって指摘された。そこでヒュームは、帰納的推論を「より確からしく」するために、帰納的推論の背後には「自然の斉一性原理」（principle of the uniformity of nature）があることを主張した（伊勢田, 2003, p. 33 ; 戸田山, 2005, p. 71）。⁹

自然の斉一性原理とは、自然の中には一定の秩序が存在し、その秩序に従って同じ事象は繰り返されるという考え方である。自然の斉一性原理を認めることによって、「箱からボールを取り出したら 5 つ連続で白だった。だから次も白だろう」という推論を正当化することができる。

しかし、この考え方自体も、過去の経験にもとづく帰納的推論によって成立しているため、真理保存的ではない。また、観念論的世界観に根差す質的研究では、自然の斉一性原理の前提は採用されず、現象の一回起性や特殊性が主要な関心になる。科学性を担保するために、量的研究も質的研究も、得られたデータにもとづく妥当な推論を行う必要があるが、帰納の前提は、ヒュームによって否定され、自然の斉一性原理も根拠が不在となった。科学の科学性をめぐるこの問題は、長い間議論され続けてきたが、科学哲学者のカール・ポパーの提唱した「反証主義」（Falsificationism）によって一定の解決を見た。

反証主義とは、科学的推論から帰納を排除し、設定された仮説が、反証されなかった場合には、その仮説の確からしさはアップするという考え方である。ポパーは、「①どんな出来事が起きても常に正しい記述と、②どんな出来事によっても原理的に反駁できないような記述は、科学理論として認められない」（西條，2008，p. 160）と主張した。①については、例えば「私の主張はすべて正しい」の記述のように、「私の主張の正しさ」の根拠が「私の主張」にある、同義反復する命題があげられる。②については、例えば「学習者に何が起きてもそれはフォースによるものだ」の記述のように、どんな変化が学習者に起きてもフォースで説明されるので、反駁できない。

この考え方は、量的研究と質的研究とに適応可能で、科学と疑似科学とをより分ける「線引き問題」（demarcation problem）の1つの基準として採用されている。¹⁰ 現在では、科学論文の多くが、演繹または帰納と併せて、反証可能性を組み合わせることによって執筆されている。また、反証を棄却することによって仮説の妥当性を主張するという反証主義の考え方は、仮説検定の帰無仮説の基礎も成している。

5. 質的研究の原則と要件

本章の最後に、質的研究に限って、質的研究が疑似科学ではなく、科学であるためには、どのような原則と要素が必要なのか述べる。質的研究には多様な手法が存在する。そして、手法が形成されてきた歴史的背景や、利用する研究者や実践家、または対象によって、質的研究に必要とされる原則と要素は異なる。しかし、質的研究が疑似科学からより分けられ、なんでもありの相対主義に陥らないために、一定のガイドラインは必要だと考える。また、質的研究が、外国語教育学の中で、しっかりとした位置を確保するためにも、より鮮明に質的研究の科学性を主張し、自覚的に質的研究の手法についても語る準備をしておく必要がある。

西條（2008）は、構造構成主義にもとづき、量的研究および質的研究が科学性を担保するためには、（a）（現実および）現象を構造化すること、¹¹ （b）構造化に至る軌跡を開示すること、という2つの原則をあげている。これらの原則を踏まえ、ここでは質的研究の科学性を担保するために必要だと考えられる3つの要素を紹介する。

厚い記述

まず、質的研究に必要な要素として、「厚い記述」（thick description）をあげる。質的研究は、言語データを取り扱う。よい研究をするためには、よいデータが必要なのは、量的研究も同じである。質的研究において、よいデータを揃えるために、現象を言語データ

化した厚い記述は、もっとも必要な要素といえる。では、厚い記述とは何か？ この点について西條（2007）は、以下のように指摘している。

厚い記述において重要なことは、意味を浮かび上がらせる（了解してもらおう）ために必要な記述をすることであって、やたらと記述を積み重ねればいいってもんじゃないんだ。記述量というのは、意味を浮かび上がらせるために二次的なものに過ぎない。（p. 26）

私たちの行為は、本質的にはあらゆる可能性に向けて開かれている。何をしても自由である。しかし、実際にはそうはならない。行為の持つ可能性は、「その場」が持つ価値や意味によって縮減され、他者にとって了解可能な振舞いとして表出し、相互作用が営まれる。私たちは、相互作用を通じて意味を交換し、同時に意味を更新しながら、常に新しい現象を構成していく。

現象は一回起性であり、刻々と移り変わっていく。相互作用を通じて表出・交換・更新された意味は、「その場」に保存することができない。そこで質的研究では、記述によって意味の動態を写しとり、現象を言語データ化する。調査者は、言語データから表出・交換・更新された意味を再構成すると同時に、現象を支持していた構造と秩序を抽出し構造化する。採用された手法、対象、およびリサーチ・クエスチョンによって質的研究には多様なプロセスがあるものの、一連のプロセスは上記のように概括可能であろう。西條（2007）の主張する厚い記述とは、上記の一連のプロセスに込め得る「豊かなデータ」（西條，2008，p. 26）のことであり、妥当な推論の根拠を示すことができる記述のことである。¹²

リフレクション

次に、質的研究に必要な要素として、調査者自らの「リフレクション」（reflection）をあげる。調査者自らのリフレクションは、どのような背景を持つ調査者が、どのような関心を持って、どのように参与したのかという説明を可能にする。これは、記述された現象から、妥当な推論がなされていることを提示するために重要な要素である。なぜならば、量的研究では、結論から推論された帰結の妥当性を判断する「準拠枠」（frame of reference）を、数的世界の一貫性に委ねることができるが、質的研究では、この準拠枠を調査者自らが用意しなくてはならないからである。そして、この準拠枠こそ、質的研究において調査者自らのリフレクティブな「視点」になる。¹³ ここに、「見える」世界ではなく、「見

えてくる」世界の「眼」の一部に調査者がなり、現象を記述し、世界の確からしさに言葉で接近していく質的研究の醍醐味があると考ええる。

データの開示性または明示性

最後に、質的研究に必要な要素として、データと分析プロセスの開示性または明示性をあげる。これは、量的研究でも求められる要素だが、質的研究にはより一層求められる。なぜならば、データと分析プロセスを開示または明示することは、何のデータを、誰が、どのように解釈したのかを説明することを可能にし、同時に、質的研究の科学性の根拠を指し示すことに他ならないからだ。また、データと分析プロセスを開示または明示することは、単に分析手法として必要とされる要素ではなく、質的研究そのものであるといえる。データと分析プロセスを開示または明示しながら、分析プロセスの息づかいを読者と共有し、「現象からのコトバの引き出し方」（西條, 2008, p. 148）を読者と揃え、得られた帰結に対して共通理解に達すること。これこそ質的研究の大きな魅力といえる。¹⁴ そして、最後に、帰納的推論で紹介したアナロジーを用いて、現象から抽出された構造と秩序の類似性（同型性）を他の現象と比較することによって、一般性を導き出すことも可能である（「アナロジーによる一般化」、西條, 2008, p. 107）。ここに質的研究によって導かれた結果が、一般化可能性に向けて開かれている根拠を示すことができる。

ここまで、質的研究に必要なとされる要素として、厚い記述、調査者自らのリフレクション、データと分析プロセスの開示性と明示性をあげてきた。それでは、なぜこうした要素は、質的研究に必要なとされるか？ それは、データから、調査者、分析方法・手順、生成された仮説、および導かれた帰結まで、質的研究のあらゆるプロセスと場面において、反証可能性を保証するためである。以下の西條（2007）は、このことをとても分かりやすく説明している。

何でもありにならないためにはどうしたらいいかっていうと、そのときに「私はこう思います」って言うのだけでは、単なる主観でしょ。「私がこうおもったからこうなんです」と言っているだけだと、「いや、それはあなたの思い込みじゃないか」ってなるから、それが行動描写でも語りでもいいんだけど、データに基づいてどの部分からどういう解釈をしたのか、その根拠を示しながら解釈を提示していくことが大事なんだ。それによって広い意味での「反証可能性」を残すことになるんだよね。（p. 28）

6. まとめ

本章では、質的研究の定義からはじめ、量的研究と質的研究の双方が根差す認識論について確認した。また、双方を統合する構造構成主義を紹介し、質的研究の科学性を担保するために必要な原則と要件について述べた。

言葉とは、単に指示対象物を意味するだけではなく、私たちは意味の表出・交換・更新を通じて現象を構成している（上野，2001）。そして、「その場」で観察の理論負荷性と共約不可能性に陥らず、自他の間で相互作用が成立するのであれば、そこで表出・交換・更新された意味は、構成された現象のシルエットのように構造と秩序を「その場」に蓄積している。自他の間で相互作用を可能にし、「その場」の現象を支持する構造と秩序とは何か？ 言葉で現象を記述し、その仕掛けと工夫を「構造化」し、モデルとして抽出できると質的研究は考えている。そして、A と B の現象の間に類似性（同型性）が認められるのであれば、A という現象から抽出し構造化されたモデルは、まだ経験されていない新しい B という現象を説明するために適応可能であり（アナロジー）、そこに質的研究の科学性を保証する一般化可能性の論理的根拠を確認することができる。

謝辞

この 1 年の活動を振り返り、改めてメソ研の仲間感謝したい。本論文は、論文とは言えない文体と内容である。しかし、初発の問題関心を深める場と、それを不十分ながらも現状の理解として「言葉」にする機会を与えられたことは、何よりも嬉しい。メソ研には、若手を中心に「研究しよう」という雰囲気が出ている。ゆる〜く「場」が開かれ、でも研究に対して熱く「言葉」を交わし、そして何より 2 次会が充実している。本論文を通し、読者と問題関心を共有し、次回のメソ研または 2 次会で議論できれば、これ以上の喜びはない。

注

1. 認識論では、普遍存在に関して、実存論と唯名論という 2 軸を立てることも可能であるが、本章では、事物の存在に関して、実存論と観念論についてのみ言及する。
2. 同一の絵の中にアヒルとウサギが見える絵を見た場合、アヒルからウサギへ全体の見え方が一息に変わることをゲシュタルトスイッチという。
3. しかし、観察の理論負荷性によって、知覚が解釈に依存することは説明できるが、知覚には客観性がないという帰結を導くことは危険であることを伊勢田（2003）は指摘している。
4. 戸田山（2005）は、この対立点を「独立性テーゼ」と呼ぶ。独立性テーゼとは、「人間の認識活動とは独立に世界の存在と秩序を認める考え方」（戸田山，2005，p. 148）である。つまり、実存論に根差す量的研究は、独立性テーゼに Yes の立場をとり、観念論に根差す質的研究は、独立性テーゼに No の立場をとる。この独立性テーゼに限っては、双方は信念対立に陥り、一致点を見いだすことはできない。結果、双方は

- 共約不可能性に陥る。
5. 西條 (2005) では、フッサールを基礎に、竹田 (1989) が提唱する現象学に依拠しながら、「判断中止」の概念が述べられている。
 6. これを現象学では、「還元」と呼ぶ (西條, 2005, p. 45)。世界の構造と秩序の存在と理解については、戸田山 (2005) の「知識テーゼ」(p. 148) の概念も参考になる。
 7. 仮説検証型であっても、仮説生成型であっても、通常、仮説というのは、経験にもとづく検証および確証によって、採択か棄却のどちらかに帰結する。しかし、この考え方は、特に現象を対象とする質的研究にとっては、とても閉鎖的である。そこで、学問の発展性を確保するために西條 (2007, 2008) は、「継承」という概念を提唱している。
 8. アナロジーとアブダクションとを狭義の帰納には含めない場合もある。本章では、広義の帰納としてアナロジーとアブダクションとも、枚挙的帰納法と同様に帰納に含めた。
 9. ちなみに帰納法の原理的限界性は、数学的帰納法には当てはまらない。数学的帰納法は、自然数の定義にもとづく斉一性原理を独自に持っているので、観察の結果に頼る必要がない。この意味において、数学的帰納法は、論理的帰納法と一線を画している。
 10. 反証主義は、「線引き問題」の 1 つの基準であるが、絶対的な基準ではない (池田, 1998, p. 37; 伊勢田, 2003, p. 40)。
 11. 西條 (2008) は、一貫して現象という言葉を使っている。本章では、前後との論理的整合性を保つために、現実という言葉が付記した。
 12. 豊かなデータについては、戈木クレイグヒル (2006, 第 3 章) にも詳しい記述がある。
 13. 西條 (2005) では、このことを「認識装置」(p. 49) と読んでいる。
 14. 坂本 (2006) は、『『わかる』とは、その分類体系がわかるということであり、『わかり合う』とは、相互に相手の分類の仕方がわかりあうことである』(p. 214) と指摘している。

参考文献

- 赤川学 (2001). 「言語分析と構築主義」上野千鶴子 (編) 『構築主義とは何か』(pp. 63–83) 勁草書房.
- 秋田喜代美 (2007). 「教育・学習研究における質的研究」秋田喜代美・能智正博 (監修) 『はじめての質的研究法 教育・学習編』(pp. 3–20) 東京図書.
- 池田晴彦 (1998). 『構造主義科学論の冒険』講談社.
- 伊勢田哲治 (2003). 『疑似科学と科学の哲学』名古屋大学出版会.
- 上野千鶴子 (編) (2001). 『構築主義とは何か』勁草書房.
- 木下康仁 (1999). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生』弘文堂.
- クーン, T. (1980). 中山茂 (訳) 『科学革命の構造』みすず書房.
- 戈木クレイグヒル滋子 (2006). 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ：理論を生み出すまで』新曜社.
- 西條剛央 (2005). 『構造構成主義とは何か：次世代人間科学の原理』北大路書房.
- 西條剛央 (2007). 『ライブ講義・質的研究とは何か：SCQRM ベーシック編』新曜社.

- 西條剛央 (2008). 『ライブ講義・質的研究とは何か：SCQRM アドバンス編』 新曜社.
- 坂本賢三 (2006). 『「分ける」こと「わかる」こと』 講談社.
- 竹田青嗣 (1989). 『現象学入門』 日本放送出版会.
- 戸田山和久 (2005). 『科学哲学の冒険：サイエンスの目的と方法をさぐる』 NHK Books.
- 新村出 (編) (2008). 『広辞苑 (第6版)』 岩波書店.
- ハンソン, N. R. (1986). 村上陽一郎 (訳) 『科学的発見のパターン』 講談社.
- フリック, U. (2002). 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) 『質的研究入門：＜人間の科学＞のための方法論』 春秋社.
- 村上陽一郎 (1979). 『新しい科学論：「事実」は理論をたおせるか』 講談社.
- やまだようこ (2004). 「質的研究の核心とは」 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編) 『質的心理学』 (pp. 8-13) 新曜社.